忠臣蔵の決算書　山本博文　著　新潮社
　映画化されましたね！^_^。

　吉良邸討ち入りに費やされた軍資金は「約七百両」――武器購入費から潜伏中の会議費、住居費、飲食費に至るまで、大石内蔵助は、その使途の詳細を記した会計帳簿を遺していた。上野介の首を狙う赤穂浪士の行動を金銭面から裏付ける稀有な記録。それは、浪士たちの揺れる心の動きまでをも、数字によって雄弁に物語っていた。歴史的大事件の深層を一級史料から読み解く。「決算書」＝史料『預置候金銀請払帳』を全文載録。

　ところで、浪士たちが実際に吉良邸に討ち入ったのは元禄十二年（1702 年）一二月一四日、旧暦だから、いまのカレンダーに変換すると 1 月 25 日だ。同様に大石内蔵助が残していた『預置候金銀請払帳』という古文書を現代の決算書に変換してみたのが本書である。じつはこの古文書を底本として 1998 年に『金銀忠臣蔵−仇討ちの収支決算』という本がすでに出版されていた。

　さて、本書は『金銀忠臣蔵』にくらべて少しお固い印象があるものの、赤穂藩お取り潰しの精算処理、軍資金と浪人生活、討ち入り計画の支出項目、討ち入りの収支決算の 4 章で、赤穂事件のリアリティを読者に伝える。たとえば、第 1 章「お取り潰しの精算処理」では藩士の階級システム、知行や切米などの給与システム、藩札とその償還方法などが概観できる。

　ところで、浪士たちが実際に吉良邸に討ち入ったのは旧暦だから、いまのカレンダーに変換すると 1702 年 1 月 25 日だ。同様に大石内蔵助が残していた『預置候金銀請払帳』という古文書を現代の決算書に変換してみたのが本書である。

　藩が自ら処分して分け合う事ができる資産と、幕府に返納するべき資産の 2 分類があるという。つまり、各藩は幕府から城や領地という資産を借用して生業をたて、期間中に増加した分は固有資産ということになるのだ。これをバランスシートの観点から見るともっと面白いであろう。

　お取り潰しにあって大石内蔵助たちは、まず藩札の償還手続きをし、資産分類をしてから固有資産を売却し、各藩士に退職金を支払った。藩札の償還と書いたが、考えてみると藩札は兌換紙幣でもありゼロクーポンの個人向け地方債でもある。赤穂藩のデフォルトによる分配率は 60%であった。資産売却にあたっては藩が所有していた 17 艘の船を現代の金融でいうところのバルクセールス（まとめ売り）にかけている。用語さえ変えれば現在の会社精算手続きとそれほど大きな差はない。

yhj*7*1 2012/12/23(日) 午後 0:44

　年末恒例のイベント、ドラマ「忠臣蔵」表向きのストーリーも面白いですが、現実的な資金繰りの視点と内蔵助のマネジメント、なかなかの緊張感、リアリティを感じました。
yhj*7*1 2013/1/3(木) 午後 4:34

店頭品薄で中々購入することできませんでしたが、やっと品物確保の連絡がありました。
yhj*7*1 2013/2/7(木) 午後 6:09

浪人が大挙して討ち入るというプロジェクトを成功させたものは何であったのか、この答えを導くには、彼らの思想面を調べるだけでは不十分である。彼らの行動の組織的なあり方、さらにそれを支えた資金など絵の視点が必要であるのではないか。
yhj*7*1 2013/2/8(金) 午後 3:44

貨幣制度と金・銀・銭の換算比率
金貨は、小判（一両)、一分金、二朱金の三種類の計数貨幣
両、分、朱の単位比率は、一両＝四分＝十六朱
銀貨は、秤量貨幣で、丁銀が３５匁～５０匁、豆板銀が１匁～１０匁、銀座の刻印、１匁は３．７５グラム、匁の端数は分、厘
丁銀は豆板銀を加え「五百目包」などし、紙で包んで通用、儀礼用の銀は、「枚」で数え、一枚は４３匁。
銅貨である銭は、銀との換算比率は、「金銀受払帳」によれば「一貫文十五匁替」約銭９６０文＝銀１５匁。
yhj*7*1 2013/2/8(金) 午後 4:05

蕎麦一杯の値段は、江戸時代を通じて十六文ほどであるので、現在の値段を４８０円とみると、一文は３０円くらいの価値になる。
銭一貫文＝銀十五匁で換算すると、銀一匁が１９２０円、金一両（＝銀五十六匁）は、１０万７５２０円
小判は、「金一両＝１２万円」、金一分は、一両の４分の１なので３万円
銀は、金の価値から逆算して、銀一匁２１４０円＝２千円、となる。
銭一文＝３０円
yhj*7*1 2013/2/8(金) 午後 4:41

当時の物価感覚
元禄８年（１６９５）幕府は貨幣改鋳を行い、金貨の品質を落としている。そのため元禄

８年、百俵で二十八両だった米が、同十年には四十二両にまで高騰し、元禄期には典型的な貨幣インフレが起きていた。

まとめ
金、銀、銭の換算率を「金一両＝銀五十六匁」「銭一貫＝銀十五匁」とし、現代の価値に換算すると
「金一両＝１２万円」「銀１匁＝２千円」「銭一文＝３０円」

忠臣蔵　決算書

　忠臣蔵について書かれた本はたくさんありますが、経済的視点から書いた珍しい本。大石内蔵助が「預置候金銀受払帳」という赤穂城の受け渡しから討ち入りまでの入出金明細書が残っており、赤穂浪士が何を買ったのか記載されています。
■藩が倒産するとどうなる
　赤穂藩は 5 万石でしたが良質の塩田があり、そこからの運上銀などで裕福な財政状況でした。赤穂城の受け渡しが決定し、倒産処理に移ります。こちらも記録がきっちり残っていて、当時の倒産処理がどう行われたかが分かります。
・領地と城、江戸屋敷は幕府へ返却されるが、それ以外のものは藩の独自財産
・藩札（負債）の処理
　発行枚数以上の藩札が流通していたようで原因として不正や贋札があったようです。40%棒引きで 60%を払って処理。
・船 17 隻を一括で売却、バルク売りです
・城付きの武具以外の武具を売却
・藩士は馬などを売却
・退職手当の支給　下級の者の方が困窮しやすいので大目に支給　大石内蔵助は受け取っていません
　最後、残務処理に関わった者に内蔵助が料理をふるまい、一人ずつに声をかけながら金子を渡したのですが、この時に台所役人だったのが三村次郎左衛門。軽い身分でありながら、内蔵助にいろいろと声を掛けられたことに感激し、侍身分でもないのに討ち入りにも参加しています。
■討ち入りは一大プロジェクトだった
　江戸組が早く討ち入ろう、駄目なら少人数でも先に討ち入ると言うのをなだめながら、吉良が確実に屋敷にいる日を選んでプロジェクトを遂行するのは至難の業でした。「預置候

金銀受払帳」からは、そういった苦労や軍資金がきれるギリギリのタイミングで討ち入りしたこともよく分かります。

忠臣蔵決算「預置候金銀請払帳」

「預置候金銀請払帳」は、討ち入り費用の個々の使途とその金額を記しただけのものですから、文書内容そのものはごく単純なものです。しかし、単純なものだけに、史料としては客観性が高く、そこから赤穂浪士たちの行動や心情が読み取れることが少なくありません。

・大石が、当初は討ち入りなど考えていなかったこと、

・元禄十五年十二月には、もはや討ち入りが延期できない状態だったこと、

等々の事実が、この史料からは明らかになっていきます。

そして何よりも明白になるのは、討ち入りにおける「資金」の重要さです。いかに大石がこの軍資金を巧みに使って、討ち入りを成功させたかが、史料の 1 行 1 行から伝わってきて、次第に手に汗を握るようになります。本書のキャッチフレーズは、「忠義だけでは、首は取れない」ですが、まさに綺麗事だけでは読み解けない、「赤穂事件の深層」が見えてきます。

本書の巻末には、「預置候金銀請払帳」の全文を載録しています。本当に、歴史の素人でも内容が読み取れる簡略な文書です。しかし一方で読み取れる歴史的事実は広大です。本物の史料に触れて、これを味わいながら、そこから知る歴史を楽しまれることを願っています。

軍資金の出所

赤穂藩浅野家の財政事情
赤穂浅野家は、現在の兵庫県赤穂市周辺で5万石を領していた
「藩」とは、1万石以上の将軍の直臣である大名が治める領地と政治組織を言う概念
江戸時代、「藩」という用語は使われず、通常は、赤穂藩士ならば「浅野内匠頭家中」と表現された。
全国に藩は270ほどあったが、10万石以上領する大藩は全体の1割
大多数は3万石以下の小藩
5万石の赤穂藩は「外様中藩」と位置付けられる。
赤穂藩の平年の財政規模　←大石瀬左衛門の従兄、津軽藩士（津軽大石家）に伝わる元禄6年の「浅野家分限帳」
「分限帳」は、一種の職員録的なもの、「浅野分限帳」には、家臣それぞれの禄高と末尾にその総計が書かれている。
瀬左衛門は遠縁ではあるが内蔵助とは同族、内蔵助の曾祖父と瀬左衛門の祖父が兄弟の関係にある。

知行切米（藩士の給料）	米	15966	石	5	斗		升	8	合														
	金	517	両	3	分					→米に換算	690	石	3	斗	3	升	5	合					
扶持方（家来の雇用費）		700	人扶持							→米に換算	1079	石	9	斗	9	升							
物成（年貢のこと）	米	17836	石	8	斗	3	升	1	合	→石高に換算	44592	石		斗	3	升	8	合	7	勺			
										↑													
										四公六民	（収穫高の4割を年貢として徴収すること）												
赤穂藩の石高は、		50000	石		ー		藩士給与分			＝	5408	石から徴収する年貢分が、藩の「蔵入地」収入											

→これが純粋な藩当局の収入で、藩主の生活費や藩庁の行政費用、参勤交代や江戸藩邸の費用などにあてられる
　つまり、藩の総収入ののうち9割近くが藩士の給料に充てられた。

この蔵入地の年貢率を四公六民とすれば、5408石の領分から得られる年貢収入は、2163石となる。

米の価値は、「金1両＝米1石3斗」 →金に換算1663両ほど、 **→現代の価値に換算して約2億円位**

赤穂藩の領地の「実高」は、5万石よりも多かった。
内匠頭長矩の父長友が弟の長恒に「私墾田」（新田開発分）3000石
内匠頭も弟大学に私墾田3000石を与え
それぞれ別家させ、私墾田は純粋な増収分だから、藩の表向きの石高を減らして大名としての家格を下げることなく「文知」（領地を分ける）できた。
しかも、赤穂藩には良質な塩田があり、そこから「運上銀」（現金の一種）もあった。
同時代史料にも赤穂藩はかなり裕福な財政状態だったとされるので、実際はその数倍の収入があったと思われる。

ちなみに、正確な数字が分かる藩士への**給与分を金で換算すると**、13720両、1両12万円の換算率で直すと、**現代での価値は約16億5千万円**となる。
これに**蔵入地の実収や塩田の運上銀を加えれば**、人件費を含めた**赤穂藩の年間の財政規模は20数億円ほどだったと推測される。**

軍資金の使途内訳

「金銀受払帳」を討入の「決算書」と位置づけ、この史料が赤穂藩旧臣たちの行動とその意義を跡付け、まさに討入計画を決算したものであった。
この軍資金の使途を、改めて使途項目別に概観する。
中には使途を区別しにくい出金もり、金で換算し、全体像を掴むための目安としたい。

科　　目	金　　額				
仏事費	127	両	3	分	18.4 %
御家再興工作費	65	両	1	分	9.4 %
江戸屋敷購入費	70	両			10.1 %
旅費・江戸逗留費	248	両			35.6 %
会議通信費	11	両			1.6 %
生活補助費	132	両	1	分	19 %
討入り装備費	12	両			1.7 %
その他	30	両			4.2 %

内蔵助は、亡君浅野内匠頭の石塔建立や山の寄進など、仏事費に100両以上使用
浅野家の再興の工作のため、赤穂の遠林寺の僧祐海を江戸に送り込んだ費用
江戸の拠点としての屋敷を芝に購入
江戸の同志の爆発を抑えるために、上方の同志たちを江戸へ送る旅費や江戸の逗留費

同志の借宅の家賃、病気薬代、雑用費用の補助
槍、長刀、着込、鉢金の武具、木でこ、鉤、すまる、鋩、鉞、たいまつ、小笛